

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：55501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770085

研究課題名(和文)書入を手がかりとした『浜松中納言物語』本文生成過程の研究

研究課題名(英文) Study of Processes for Text castigation of Hamamatsu Chunagon Monogatari; based on the comments written by classical Japanese scholars.

研究代表者

赤迫 照子 (AKASAKO, Shoko)

宇部工業高等専門学校・一般科・准教授

研究者番号：70452612

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：現在、『浜松中納言物語』写本は約60点確認できる。それらは全て江戸時代の書写である。本研究では可能な限り実見による調査を実施し、各写本の翻刻と書誌情報の整理に取り組んだ。そして各写本に存する和学者による書入を手がかりに、『浜松中納言物語』の流布状況と写本同士の相互関係を整理し、度重なる校訂で正しい本文が生成されていった過程について、解明を進めた。

また、今後、新校本を作成することを視野に入れて、対校本の作成に取り組んだ。

研究成果の概要(英文)：Presently, manuscripts of Hamamatsu chunagon monogatari are identified about 60. As much as possible, I have investigated and reprinted manuscripts of Hamamatsu chunagon monogatari. When to do it, I have based on the comments written by classical Japanese scholars. The future, in order to publish, I was editing the text of the various manuscripts of Hamamatsu chunagon monogatari.

研究分野：日本文学

キーワード：浜松中納言物語 書入 写本 本文 和学者 物語享受

1. 研究開始当初の背景

本研究の契機は、申請者が平成 20 年度～22 年度の 3 年間、基盤研究(C)「『とりかへばや』伝本の流布状況を視点とした江戸時代における物語享受の研究」(研究代表者西本寮子 研究課題番号 20520170)の研究分担者となり、江戸時代における『浜松中納言物語』享受の研究を担当したことによる。

現存する『浜松中納言物語』写本は全て江戸時代書写である。江戸時代以前の祖本にできるだけ接近していく従来の伝本研究とは別に、「江戸時代の誰が物語を読み、書写したのか」に着目し、享受研究と伝本研究を関わらせるかたちで取り組んだこの研究で、申請者は江戸時代の『浜松中納言物語』書写の様相が『とりかへばや』の様相と似ていることを具体的に指摘した。その際、大きな手がかりになったのは和学者による「書入(本研究では校合・付注・考証の総称として用いる)」であった。

従来の『浜松中納言物語』研究において和学者による書入は、大阪府立中之島図書館不忍文庫本の萩原宗固筆のものをはじめ、表紙裏や遊紙に記された数点しか、具体的に報告されてこなかった。各写本の素姓の手がかりにはなるものの、その書入の転写状況に関する詳しい考究はなく、また、書入によって『浜松中納言物語』本文が校合されていく過程についても、書入をした和学者の享受を視野に入れた研究は行われていなかった。

『浜松中納言物語』の本文については、松尾聰氏が A～F の六種に分類する方法を確立され(『浜松中納言物語伝本考 本文批評の方法の実例を示すための』『学習院大学研究年報』第 1 号 昭 29・12) その分類は小松茂美氏『校本浜松中納言物語』(二玄社 昭 39。以下『校本』)に踏襲された。その後、池田利夫氏は共通脱行箇所の数基準に A～F を体系化され、甲類・乙類第一～四種の五種に分類された(『浜松中納言物語伝本系統試論』『鶴見女子大学紀要』第 10 号 昭 42・12)。池田氏によれば、巻四までの諸伝本(つまり五巻本である尾上兼英氏蔵本・広島市立浅野図書館浅野家旧蔵本の巻五を除く)は全て共通祖本から派生し、その祖本は室町末期書写と推定されるという。したがって、伝本は全て一系統である。そして現在は、比較的祖本に近い A 類/甲類本が研究テキストとして用いられるように定着した。伝本系統の整理については、松尾氏・池田氏の論考に尽きている。

このように、『浜松中納言物語』本文研究や伝本研究では祖本へのアプローチは着実になされてきたものの、それ以外では、諸本の新発見の特徴が点描されるに留まっていた。精力的に新出本を調査された須田哲夫氏の各論も、所々で他本との相互関係や書入が孕む問題に言及しつつも、結局は本文系統を判断することに主眼が置かれている(須田哲夫氏・南昇氏・佐々木新太郎氏「未紹介本調

査報告 1 岡山大学図書館所蔵小野文庫本『浜松中納言物語』について」『大東文化大学紀要』第 32 号 平 6・3 他 5 点)。

しかし、「誰が『浜松中納言物語』を読み、書写したのか」「誰が誰の本を貸借したのか」という享受研究の視点で写本調査を進めていくと、「一体、何が『浜松中納言物語』本文なのか」「何をもちて正しい本文が生成されてきたのか」という本文研究の問題が浮き彫りになってきたのである。

前述のように、江戸時代の『浜松中納言物語』書写の様相を検討する際に大きな手がかりになったのは、和学者による書入であった。大阪府立中之島図書館にて新出本である中西文庫本(四巻四冊)を発見し、調査したところ、その書入は伊勢権禰宜で本居学派の和学者である足代弘魚(1787～1817)によるものの転写であった。本文系統は D 類/乙類第三種本である。早速、D 類/乙類第三種本の複写物を収集してみると、無窮会神習文庫本・宮内庁書陵部紅梅文庫本に同じ書入を見つけた。そこで、これら写本三点が近い関係にあるのを検証し、さらに、D 類/乙類第三種本の相互関係を部分的に解明して、本居宣長記念館本(本居春庭書写 本居宣長自筆奥書 四巻四冊)の流布状況を明らかにした。同時に、書写と書入によって本文が他の本文と混じり合い、新たな本文が生成されていく過程も解明できた。(『大阪府立中之島図書館中西文庫蔵『浜松中納言物語』について』『広島大学大学院文学研究科論集』第 72 号)。

この研究で大いに活用したのが、『浜松中納言物語』研究には必須の『校本』である。パソコンの無い時代において、『校本』刊行までには筆舌に尽くしがたい労力が費やされたはずである。しかしながら、研究を通して『校本』の限界を痛感することになった。『浜松中納言物語』研究にとって基礎資料として欠かせない『校本』であるが、本文への書入は記載されていない。小松氏の判断で適宜、補入や訂正が本文として認定されているのである。膨大な情報を整理する常として、誤りも存する。少しずつ写本を実見し、複写物も収集していく中で、『校本』の「諸本解説」にも訂正を要する箇所があることが、次第にわかってきた。

『校本』作成の頃よりも、学術機関での閲覧手続き・複写物入手・撮影は飛躍的に簡便になり、Web 上での写本の画像公開も進んだ今ならば、悉皆調査も不可能ではない。それに、『浜松中納言物語』写本は約 60 点に過ぎない。『源氏物語』『狭衣物語』に比べて各段に少ないのである。そこで、研究期間内に可能な限り写本を調査し、和学者の校訂で書入が本文化して『浜松中納言物語』の正しい本文が生成される過程を解明するために、本研究を申請するに至った。

大阪府立中之島図書館で新出本を発見したことも、科研申請に踏みきった理由として大きかった。新出の中西文庫本は、不忍文庫

本の閲覧申請書を書くためにカード目録をめぐって偶然、見つけたのである。パソコンで国文学研究資料館「日本古典籍総合データベース」「日本古典資料調査データベース」を検索するだけでなく、実地に冊子目録やカード目録を手にとりめぐり、あるいは各所に赴いて聞き取り調査を行うことの重要性を思い知らされた出来事であった。未発見のまま埋もれている写本の捜索に取り組むためにも、科研に申請する必要があると判断した。

2. 研究の目的

これまで述べてきたように、和学者の書入を手がかりにすることで写本の相互関係や流布状況を整理し、度重なる校訂で正しい本文が生成されていった過程を解明することが、本研究の目的である。従来の『浜松中納言物語』研究のように祖本捜索や本文系統の分類を着地点にするのではなく、江戸時代のどのような文化圏で如何に本文が研究されてきたのか、その動きのありようを総合的にとらえることを目指す。

この研究を進めるためには、当然、閲覧可能な限り、写本の調査をしなければならない。そこで、研究成果を単に論考として発表するだけでなく、将来、新たな校本を刊行するための足がかりとすべく、書入も含めた対校本（原稿）の作成を進めることも目的とした。

3. 研究の方法

写本の悉皆調査を目指して、基礎作業を重点的に取り組む。手順は以下の通りである。

(1) 確認できる全ての写本について、可能な限り実見して調査し、複写物入手する。所蔵機関関係者に所蔵の経緯について、聞き取り調査も行う。実見が適わない写本は、複写物・公開の画像データ等で調査をする。

(2) 本文・書入を翻刻し、本文の揺れを明らかにする。

(3) 調査結果をまとめ、以下～の視点から『浜松中納言物語』の流布状況及び写本同士の関係、本文の様相を解明する。

書入を手がかりとした各系統内における諸本のさらなる体系化

書入が転写及び本文文化されていく過程の実態解明

書入・奥書を手がかりとした、和学者による書写本流布状況の解明

江戸時代における『浜松中納言物語』享受の史的展開

4. 研究成果

(1) これまでに確認した『浜松中納言物語』現存写本は約60点である。これらの内、『校本』・国文学研究資料館「日本古典籍総合データベース」に記載がないが、所蔵情報

を得ているのは以下の通りである。

大阪府立中之島図書館中西文庫本

前述のように、本研究以前、申請者が発見した。内題「浜松中納言物語中納言物語」

大妻女子大学図書館本（四巻四冊）

中川忠央旧蔵本。内題「浜松中納言殿物語」。未実見だが、守屋利花氏「大妻女子大学図書館蔵本『浜松中納言物語』について」(『大妻国文』第17号 昭和61年3月)よりD類/乙類第三種本と判明。

(2) 『校本』の底本・校合に使用の諸本（版本の丹鶴叢書本を除く）の計36点のほとんどは、実見もしくは複写物・画像データによって調査ができた。

(3) 三年間で調査（実見以外に複写物・画像データ調査も含む）をした写本の内、『校本』に記載のない本は以下の通りである。

萩市立萩図書館本（四巻四冊）

版本である丹鶴叢書本の写し。ただし、丹鶴叢書本の異本注記が適宜採用され、本文文化された箇所がある。版本の書写と確認できた写本は現時点で該本のみ。〔雑誌論文〕で報告。

多和文庫本（四巻四冊）

鶴見大学図書館佐竹義祇女家寿姫筆本（四巻四冊）

鶴見大学図書館本（巻二のみ一冊）

鶴見大学図書館では、他に池田利夫名誉教授寄贈資料である松尾聰博士の『濱松中納言諸本對校表』をはじめとする研究成果物・原稿・私製の影印本等も閲覧させていただいた。

東京大学文学部国語研究室本（巻一・二の二冊）

関西大学図書館本（四巻四冊）

実践女子大学図書館黒川文庫本（四巻四冊）

内題「浜松中納言殿物語」や本文の様相からD類/乙類第三種本と判明。

茨城大学図書館管文庫（四巻四冊）

茨城大学図書館の画像公開による。

中田光子本（四巻一冊）

新潟大学附属図書館佐野文庫本（四巻四冊）

早稲田大学図書館九曜文庫本（四巻二冊）

伊勢神宮文庫本（巻二のみ一冊）

昭和二十七年孫福弘哉氏献納本。内題「浜松中納言殿物語」や本文の様相からD類/乙類第三種本と判明。

国文学研究資料館初雁文庫本（巻一のみ一冊）

西下経一氏旧蔵。F類/乙類第一種本。江戸末期の和学者江沢講修（1781～1860）の蔵書印と清水浜臣の識語が存する。書入は、筑波大学附属図書館蔵の一本とほぼ一致することが判明した。この筑波大

学附属図書館蔵の一本の模写本だという東北大学附属図書館狩野文庫蔵本(四巻四冊 模写の指摘は『校本』による)と、注の様相の比較・検討も行った。これらの分析結果から、初雁文庫本が筑波大学附属図書館蔵の一本の兄弟本を転写したものと推定できた。これにより、F類/乙類第一種本における写本間の関係の整理のための端緒を得ることができた。〔雑誌論文〕で報告。

国文学研究資料館本(四巻四冊 請求番号サ4-103-1~4)

内題「浜松中納言殿物語」・奥書からD類/乙類第三種本である本居宣長記念館本の転写本と判明。跋文は不二文庫松乃や旧蔵本と同じ。

国文学研究資料館本(四巻四冊 請求番号サ4-10-1~4)

典拠を記した紙片数点を挟む。

彰考館文庫村上真澄校本(四巻四冊)

『校本』記載の彰考館文庫本とは別本。国文学研究資料館のマイクロフィルムを閲覧したところ、蔵書印「潜庵閣蔵書記」より徳川齊昭旧蔵であり、書入より天保六年村上真澄校と判明。また、書入と丁数より、小山田与清が『浜松中納言物語目録』作成時に依拠した本の転写本と考えられる。内題「浜松中納言殿物語」や本文の様相からD類/乙類第三種本と判明。〔雑誌論文〕で報告。

(4)調査を進める中で、知りえた写本の所在情報は以下の通りである。

名古屋市鶴舞中央図書館本(四冊) 国文学研究資料館「日本古典籍総合データベース」記載

戦災で焼失。

香川県立ミュージアム松平公益会本(四巻四冊) 国文学研究資料館「日本古典籍総合データベース」記載

高松藩松平家旧蔵。『校本』では「昭和二十年戦災に焼失」とあるが、実見し、同一本なのを確認した。

早稲田大学図書館九曜文庫本(四巻二冊)

中野幸一氏旧蔵。『校本』では兵庫県立神戸高等学校蔵本。早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」にて確認。

この他にも、『校本』「諸本解説」39頁広島大学図書館琴平書籍館旧蔵本に「同社の宝蔵にはいま一本が伝えられるが、未調査。」とあるので捜索に赴いたが、発見できなかった。

(5)(4)で適宜記したように、研究成果は写本毎にまとめて、学術論文として発表した。

(6)各写本の調査データは、フォーマットを定めてまとめた。これは将来、新たな校本

を刊行する際に「諸本解説」を附すことを視野に入れてのことである。

(7)D類/乙類第三種本は、『校本』では4点しか使用されていないが、本研究の調査ではこの4点以外に9点も確認できた。計13点である。それらは本居宣長記念館本と、門人によるその転写本である。もちろん、宣長が入手した親本が別に流布した可能性も捨てきれないが、現時点では書入の様相や書写奥書から全て本居宣長記念館本の転写本だと推定している。先日、本居宣長記念館本の転写と思しき新たな写本1点の所蔵情報を入手した。

本居学派の書写活動は本研究着手以前に把握してはいたが、当初の想定以上の写本数であった。『とりかへばや』と同じく『浜松中納言物語』も、本居一門の転写による伝本が多いことを再確認できた。そして、以前からの中島正二氏の指摘のようにこの書写活動はまさに一門の「連帯感を強化し、成員を拘束する」(「物語たちの失敗」『日本文学』平成15年10月)のものである。

(8)書入が複雑で、数も多いのがE類/乙類第四種本とF類/乙類第一種本である。細字や、塗りつぶしてある箇所があって全ては判読できていないが、可能な限り翻刻をし、写本毎にデータをまとめた。これによって調査の際、書入を手がかりに写本同士の間相互関係を検討するのが容易になった。

(9)公家や武家伝来の本文の姿を残すA類/甲類本・B類/乙類第二種本・C類/乙類第一種本に関しては、書入が無い本が多い。ただし、大阪府立中之島図書館不忍文庫本(B類/乙類第二種本)は清水浜臣本と校合しており、静嘉堂文庫小林歌城本(B類/乙類第二種本)は清水浜臣による考証を写している。そこで、これらの書入を整理した。

(10)前掲以外にも、収集した紙焼写真・画像データの翻刻に取り組み、書入も含めた対校本の原稿作成を進めた。進行状況はやや遅れている。今後もできるだけ迅速に翻刻を進めて対校本の完成を目指したい。

この対校本を基礎にして、新たな校本作成と出版へと展開させるのが、今後の課題である。

(11)所蔵情報は確認しているが、まだ未調査の写本も存する。加えて、研究機関終了間際になっても、新たな所蔵情報を入手した。引き続き、『浜松中納言物語』写本の悉皆調査に取り組む。

5. 主な発表論文等
〔雑誌論文〕(計3件)

赤迫照子「国立国会図書館蔵『浜松中納言物語』の依拠本(一)」、『宇部工業高等専門学校研究報告』62号、査読無、2016.3、pp.1-13

赤迫照子「国文学研究資料館初雁文庫蔵『浜松中納言物語』について」、『宇部工業高等専門学校研究報告』61号、査読無、2015.3、pp.1-4

<http://ypir.lib.yamaguchi-u.ac.jp/un/metadata/874>

赤迫照子「萩市立萩図書館蔵『浜松中納言物語』について」、『宇部工業高等専門学校研究報告』60号、査読無、2014.3、pp.53-56

<http://ypir.lib.yamaguchi-u.ac.jp/un/metadata/865>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

赤迫 照子 (AKASAKO SHOKO)
宇部工業高等専門学校・一般科・准教授
研究者番号：70452612